



SURPRISE FUTURE

- β -

write:chairo
illust:J.

悲しみを繰り返し、僕等はどこに行くのだろうか？

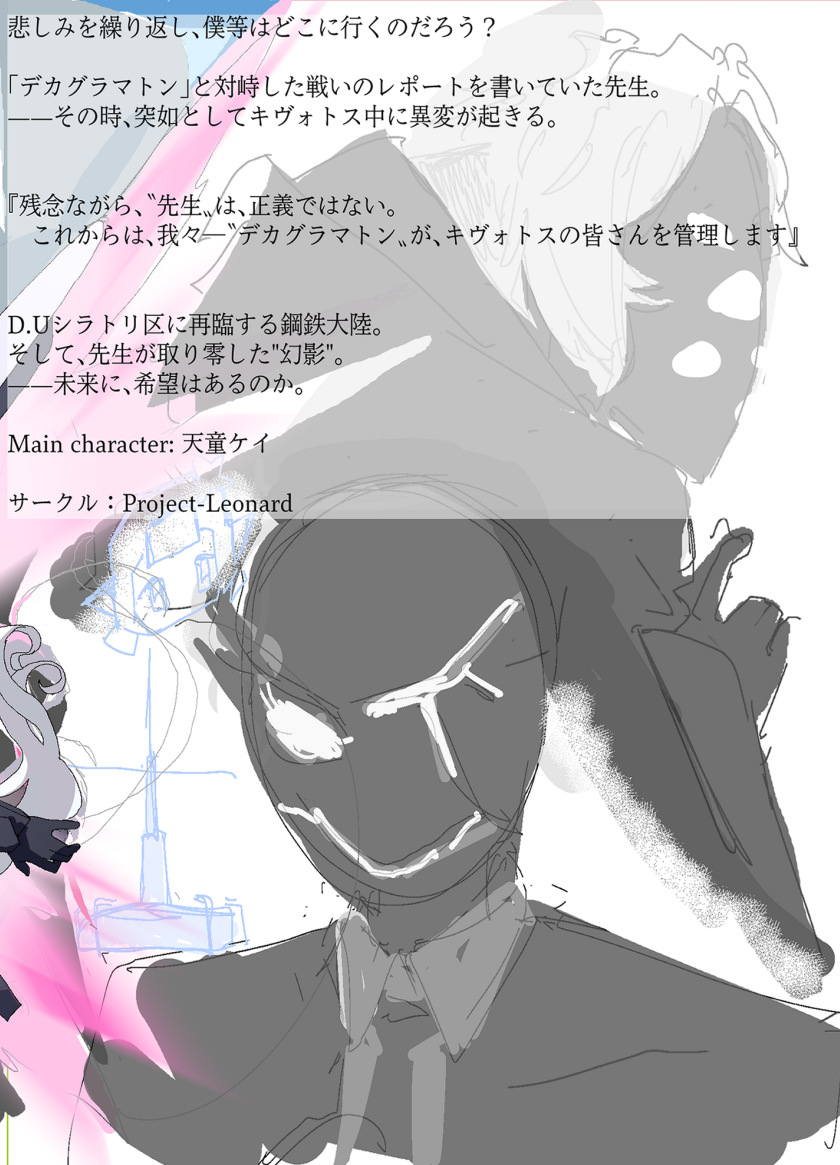
「デカグラマトン」と対峙した戦いのレポートを書いていた先生。
——その時、突如としてキヴォトス中に異変が起きる。

『残念ながら、“先生”は、正義ではない。
これからは、我々——“デカグラマトン”が、キヴォトスの皆さんを管理します』

D.Uシラトリ区に再臨する鋼鉄大陸。
そして、先生が取り零した“幻影”。
——未来に、希望はあるのか。

Main character: 天童ケイ

サークル：Project-Leonard



SURPRISE FUTURE

著 chairō

Illustration:J.

Contents,

I. 『time』 ——P8

II. 『re-ray』 ——P25

Last episode 『W』 .——P51

以上が、「デカグラマトン」と名乗る集団が行った一連の事件の詳細である。

果たしてあれは、正しかったのか。

あの犠牲は、必要な事だったのか。それを識る術は——今の、私には無い。

『これで校了です。お疲れ様です、先生！』

「……ふう」あの、ヘイローが空を覆った日。鋼鉄大陸の事件から数ヶ月が経った。

私はといえば、五日ほど業務を空けた報告として、連邦生徒会に提出するレポートを纏めていたところだった。

……本当に、色々あった。ケイのこと、アイン・ソフ・オウルのこと。

マルクト、そしてデカグラマトンのこと。

……何故、という意識がまた、私の心を過ぎるが、それは別の話だ。

取り敢えず、やるべき事は済んだ。リンちゃん、進捗を確認しに来るまで、あと二十分ぐらいある。……少し休むか……。

私は、目を瞑る。……最近、あんまり眠れてないな。

あの子たちの、ことが……。

振り返るな、とその子はいった。だけど、もし私に。

そんなモノを耐える器などなかったとしたら？

Next Story

次に進む勇気なんか、消え失せていたとしたら？——これは、そんな物語だった。

これは、延長線上の話。

未来へ進む為の、僅かな猶予の話。

決して交わる事のない、たった僅かの“交流”の話。

しかし、それでも。貴方が望むなら、私は話そう。

これから起こる、懺悔の話を。

I. 『time』

「……お疲れ様です、先生」リンちゃんが、やってきた。予定通りだ。

「お疲れ様。レポートは、ここにあるよ。」

「ありがとうございます。……相変わらず、一人称が多いですね。」

それと三人称も混ざってますし。……私の文章はクセが強いらしく、リンちゃんはいつも苦笑いするんだ。「はは……ごめんね。」

「ですが今回の件に関して、突発的な事態だったとはいえお疲れ様でした。

報告ですが、その後の大陸の処理について——」

「——リンちゃん？」返事がない。

思わず、デスクから目を離す。「どうか、したかな……？」

「つい、て——て、——つ。」

「……リンちゃん!?」思わず、私はシステムの箱を確認する。

「……。」

「プラナ、リンちゃんのバイタルを確認して！」

「……困惑。レム睡眠と同じ状態になっています。」「そんな……!?」

私は身構える。襲撃か。連邦生徒会に支給されているベレッタを構え——

「……貴方、誰ですか？」「……え？」

リンちゃんは、虚な眼のまま、私に問いかけた。

やがて、その眼は……私の持つ、ベレッタに向けられる。

「ち……近づかないでください！」「……!?」

そして、リンちゃんは、連邦生徒会のコートから拳銃を出し――

発砲した。「な……!?」

「な……なんで銃弾が効かないの!?」「リ、リンちゃん、落ち着いて……!!」

アロナ、と私は取るものも取り敢えずシツテムの箱を確認する。「……状況は!?」

『不明です！なんで、こんな事に……!?』

『提案。……今は、一先ずシャーレを出しましょう』『……分かった』

一先ず判った事は……アロナやプラナ、シツテムの箱すら感知不明な状況が起きていると言う事。私は迷わず、シャーレから出た。

『キヴォトスの市民の皆様にお知らせします』

『今まで、貴方たちは—— “先生” と云う存在に、操られていました。』

『残念ながら、“先生”は、正義ではない。

これからは、我々——』

“デカグラマトン”が、キヴォトスの皆さんを管理します。

「なっ……!?!」……どういう事だ。デカグラマトンは消えたはずだ。

なら……マルクト? いや……彼女にそんな気はもうないはずだ。

あるいは……デカグラマトンを騙る何者か……? 「……いたぞ!」

考えている矢先に、怒号が飛ぶ。「……あなたは」

「……久しぶりだな、先生。」そこに居たのは、カイザーのジェネラルと……PMCの大部隊。

「私が認識できてるんだね。……何か用かな」「そうだな……一先ず、言つて置くべきことだが」

くつくつと、カイザーのジェネラルは嗤う。

「……『クライアント』の意向なんだな。死んでもらおう」「なっ……!？」

「撃て!……」一斉に、弾幕が私を襲う。「ぐっ……!」

『先生!力があまり……』『……救援は出した!？」

『出しましたが、応答がありません!このままでは……!』……なら、これを使うしかない。

私は、大人のカードを出し……そうする間に、レーザー砲の爆撃がカイザーの兵を捉えた。

「何……!？」『……先生!』救援要請に、唯一応えてくれたのは……

「助かったよ、何がどうなってるの!？」

「知りませんよ！モモイも、リオも、どこか気の抜けた顔をして動かないし……!!」

そこに居たのは、ケイだった。

彼女が、鋼鉄大陸で使ったヒマリのライドウェアを使って、空中から砲撃してくれたところだ。「……乗って!!」

「——うん」「逃がすな！」言われるがまま、私はライドウェアに乗り、ケイちゃん共々逃げ仰る。「……また、ケイちゃん呼びですか。もう……」

「……有難う。……これ、どういう状況だと思う？」「解りませんよ！ただ、どうも“下”を覗る限り……」……キヴォトスの学生達が、不自然に突っ立って『デカグラマトン』が流している映像を見ている。……どこか、虚ろな表情で。

「これは……」「……恐らく、キヴォトス中がこうなんだと思います。正気なのは私達と……」

「カイザーのジェネラル……何故だろう。」恐らく、口ぶりからすると。

『クライアント』が、今回の黒幕だ。それも……かなり、資金のあるタイプの。

「……まさかな」嫌な予感がするが、今はそれを心にしまった。

「何か、心当たりが……っ!?」ケイちゃんが、驚く。……私達の体が、ぐんと下がっていくのを感じる。

ライドウェアの故障だろうか。いや、これは……兎に角。

私達は確実に、墮つこちていた。「……っ!?」

アロナ、と私は叫ぶ。「……ライドウェアのコントロール奪還を試みます!」

ライドウェアは暫く持ち直すが、……変わらず、拮抗しているようだ。「ハックに使われているのは……デカグラマトンの信号に、これは……!?」

「警告。以前、……アクセスした事のある、経路です。」……プラナも助力するが、ハッ

キングの綱引きは……私達の敗けだった。

何故なら、プラナが言い終わる前にカイザーの対空掃射を受け、私達は墜落したからだ。

「……がつ!!」

「——先生!」ケイちゃんが、着地の瞬間私を抱き止めた。……流石は、新しいキヴオトスの生徒だ。「……ありがとう。」

「氣を付けてくださいよ。この身体、死ぬほどの無茶はできませんから。」そう言って、ケイちゃんは私を下ろす。「……一旦隠れよう。」

そう言つて、私達は路地裏へと身を潜める。

「……は、はあつ……。」久しぶりの運動だ。身体が鈍い……。

ふと、そんな折。私は、「それ」を見た。

「……先生？どうしましたか？」「……そんな。」建物の日陰をすり抜ける、「彼女」の片鱗を。

いや、そんなはずはない。そう思おうとした。

だって、「彼女」は――。

「……先生？どこに行くんですか!？」

「……」気づけば、躰の方が先に、動いていた。

だって、そんな、彼女は、いや、「彼女達」は、もう。

——馬鹿な。

「来たね。」「予定、通りですね。」「……ミッション、開始、です」

そんな。

『あーあ、先生。あなたが——
振り返っちゃったから、こうなっただんだよ?』

その瞬間、私は心の底から後悔した。

『彼女達の幻影』を、追った事を。

そこにいたのは、消えたはずの。

アイン、ソフ、オウルだった。「……!!」

「先生！一体、何、が」……。

ケイも、この光景を視て、絶句していた。

この光景を、拒絶するような瞳を用いながら。「——なんで」

『やあ、先生。それに——ケイ。』

『お久しぶりですね、先生。』『お変わり、なさそうですね』

「——、あ、……。」

私は、頭が真っ白になっていた。「……なんで、貴方達がここにいるんですか」

先に意識を取り戻したのは、ケイだった。「私達、……ずっと、貴方達の事——」

『過去の話でしょ。もういいじゃん。』

「……な」

それは、空白と虚無を形にしたような、対峙と訣別だった。『……先生に、お願いがあつて来たんだ。』

「……、……。」何かな、とすら言えなかった。

彼女達が、息をして喋っている事がまだ信じられなかったからだ。

お構いなしに、ソフは続ける。

「——それでね、先生には……」そう、言い終えるより前に。

私は、地面に項垂れていた。「……先生!？」

ケイが、慌てふためくが。そんな事すらも私にはどうでも良かった。「……ごめん」

私は、君達に謝らないといけない事がある。

「ごめん、ごめんなさい……!!」

私が、私のせいで、私が責務を果たさなかったせいで、生かして、あげられなく

て……!!」

「……先生、しっかりしてください……!!」ケイが、何とか私を抑えようとする。

だけど、無意味だった。「『生きるべきだ』、つて云ったせいで、言ったのに、その道すら与えられなくて……こんなに、私が、弱くて……!!」

『どうでもいいよ、そんなの。』

「は……？」 ケイが、哑然とする。

『だって……いいよね。貴方達だけ総て持っていて、ハッピーエンドを掴んだんだから』

「……、……。」

『愉しかったですか？私達を踏み躪って、のうのうと、その生を享受した有様は。』

「……何を、言ってるんですか」

『結局……貴方達は希望を呟くだけ呟いて、私達に何もしなかったただけじゃ、ないんですか……？』

私は、もう、壊れそうになっていた。「あ、……。」

『なのに、貴方達は振り返ろうとした。私達の『幻影』に、追い縋ろうとした。それが、この罰だよ。先生？』

そう言つて、背後にいる何者かが貌を出す。

「……お前、は……」

最悪の事態だ。

私に先刻の絶望感すら遠くに追いやるほどの、怒りが過ぎる。

「……これはこれは。元気にしてましたかな？」

そこに居たのは、地下生活者。かつて私が、「相手にする暇などない」と拒絶した者。

「そ。今の私たちの『マスター』。」「ソフが喋るが、……私はもう気にも留めなかった。

「……この子達に……何をしたんだ」

「……そう畏れなざるな。…暫しこの間に、降ってきた『欠陥体』と屑鉄を手に入れましたね、『再利用』したまでです」

「……お前……!!」私は腑が煮え繰り返りそうになる。

「神のなり損ないから屑鉄を「繋ぎ合わせる」のには苦勞いたしましたね。……それがこの結果ですとも。」

今のこの鉄共は、ただの『屑人形』ですとも。

KPに従順に動く、ただの「屍骸」^{スワフマン}とでも言いましょうかな。

そう、高らかに宣言する。

私は吠える。……吠えるしか、なかったんだ。

「……どこまで、この子達を侮辱すれば気が済むんだ……!!」

「そりゃ、そうでしょう。役目を終えた「投棄物」^{ジャンク}を、使つてるだけですから。……おや。捨てていったのは貴方達ではないですかな？」

「……………」
「……………」もういい。もう、私は役割を放棄した。

大人のカードを出す。「……先生……!？」

「……また『チート』ですか。大人気ない事を」「……座標を尖兵に転送」

ソフが何かした。すると……

「……!!」「先生っ！この状況じゃ、『それ』も役に立たないですよ……!」

……私達は、通路をデカグラマトンの尖兵達に塞がれてしまっていた。

「カード単体なら、このように詰ませることができずとも」

「……まだだ。せめて、差し違えてでもお前を」

私はカードを遣おうとする。……こいつさえ、斃せれば。

後は、生徒達に任せればいい。「……しつかりしてください!」

「——ッ。」

ケイの吠える声に気を取られ、……私は、ケイにカードを取られてしまっていた。

「いい加減にしてください！先生が、死んだら……遣される者の事も、考えてくださ
い」

「……ケイ」

『あー、もういいかな。って』

ソフの指示を受け、デカグラマトンの尖兵が発砲する。

……それを、ケイがルミナス・ノヴァで防いだ。

「ぐっ……！」 「ケイちゃん！」

なんで、こんな事を。そうソフ達に言おうとした。

だけど、却ってきたのは無情な答えでしかなかった。

……先生。何度私達に問いかけても、無駄だよ。私達は管理^{Statio}者に従う。

『だから先生。私達の事を可哀想だと思うなら——
この結果を後悔してるなら。贖罪にここで、死んで？』

「……………」。「先生、今は…………!!」

分かつてる、とすら今の私には言えなかった。

「……先生。私が路を作ります、だから先生はその隙に——逃げてください。」

「ケイちゃん…………!! やめて!!」

「お別れです。先生——愉しかったですよ、今迄のこと。それともしアリスに会えたら

——」

デカグラマトンの兵隊が、発砲する。

私は、網のように張り巡らされた弾幕に、それに立ち向かうケイに。

ただ、見ていることしかできなかった。

II. 『re-ray』

「……？」

私は眼を開ける。どうやら私達はまだ、生きているらしい。

「えっ？……先生、無事ですか？」「……ここは」

「クク。どうです？キヴオトスを救った先生からお尋ね者へと堕ちる気分は」

そこにいたのは、黒服だった。そして、ここは……

旧ゲマトリアのアジトだ。私も一度通ったことがある。「……お前」

「久しぶりですね。いや、〃初めまして〃、ですかね。其方の方は」

クク、と奴は笑いを含めている。「……何故、私達を助けた？」

「……それこそ、”クライアント”の意向でしてね。」そう言つて……奥から、衣擦れの音が聞こえる。「……君は」

「……、先生。」そこに居たのは、マルクトだった。

「デカグラマトンのオーパーツの情報——統べる存在の”一端”を提供いただく代わりに、貴方達を助けろと。そういう契約ですよ。お解りですか？」

「すまない。先生。だが我は——」

「お前……!!」先生は黒服に掴み掛かろうとする。

……何か災厄を引き起こすなら赦すつもりはない、という眼で見るが……

奴は余裕だ。「お忘れですか？我々「神秘をデマトリア観察する者」は解散しました。私がそれに応じたとしても、メリットがない」

「……何が目的だ」「……よろしい、お話ししましょう」

そう言つて、奴は続ける。

「報復ですよ。かつての友の軀の。」

……無礼を働いた奴への、と黒服はどこか考えるような仕草をする。

「地下生活者……と言いましようか。奴は以前私が理外に追放しましてね。これは私の不手際でもあります。……あなた達に協力する代わりに、奴の身柄を私に寄越してくれませんか？それが条件ですよ」

目には眼を、齒には齒を。……これは、何方がその『遺物』を争奪できるか、という競争です。

異論ありませんね？と、黒服は続ける。「……。」

「……あの子達は」「……っ……」

「ああ、奴が使っている『あれ』のことですか」……こいつ。

「……………言葉を改めてくれ。でないと私はお前に——」

私はマルクトを想い、庇う。——だが。

「……………我は大丈夫だ。あの子達は……………」

「拾ってきたのでしよう。元“鋼鉄大陸”から回収したオーパーツを元に、欠陥体を繋ぎ合わせてコアと記憶を復元させた。」

「その上で……………何らかの洗脳状態に置いたのでしょうか。あるいは——」

……………或いは、と少し言い淀むような空気が流れた。